

# 六ヶ所村における山樵

(やまがっ:山の中に住み、木こりなどの生活をしている人)

## 1 尾駁地区の炭焼き

明治の頃、農作業や漁が生業。尾駁集落には元来、部落教習の山林も私有の山林もなく山樵関係の仕事は従来行われていなかった。大正の末期に、東北町から寺下さんに婿入りした人が、尾駁に製炭業の仕事<sup>せいたんぎょう</sup>を伝えた。製炭の製造は、営林署から国有林を払い下げて行われた。尾駁の木炭業は戦後急速に廃れ昭和37年くらいからやる人が全くなくなってしまった。

## 2 二又地区の炭焼き

山樵の仕事は、明治の初めころにはすでに行われていたようである。明治頃の炭焼きは「ホリガマ」によるシロズミの生産だから、カマを掘る関係上、近くに沢の崖<sup>がけ</sup>を利用して行われ、二又ではエビトリ穴沢とよぶ尾駁沼の近くや泊川の上流、横浜よりの崖で多く焼いた。

大正4, 5年の頃、三戸の田子村から奈良崎・田茂という先生が二人やってきて、「ドガマ」による製炭法が伝えられてからは木の伐り出しに便利なところならばどこでもカマが作られるようになった。女たちがカヤを編んでスミスゴを作るようになる。ナラ・カシラギが最良で一等炭、ブナが二等炭でそれ以外の雑木炭<sup>ぞうきすみ</sup>は、ジャグと呼ばれる粗悪炭<sup>そあくすみ</sup>はマル俵<sup>だわら</sup>に詰められた。原木はすべて国有林の山を払い下げて伐採<sup>ばっさい</sup>した。

12月12日は、山の神様の祭日で集落をあげて祝った。この日は、山ドメになっていて「鉄音を立てるな」「山に入るな」といわれた。若い者による能舞<sup>のうまい</sup>が秋戸利明さん宅で演じられ、集落の人すべてが集まってみたものだ。

明治末から大正期にかけて川畑丑松<sup>うしまつ</sup>という人が、東北本線や大湊線で使用する鉄道<sup>まくらぎ</sup>の枕木を伐り出していた。…鉄道の枕木の切り出しは、ダケまたはダケ山<sup>しょう</sup>と称する吹越烏帽子岳<sup>ふっこしえぼしだけ</sup>の山腹<sup>さんぶく</sup>から伐り出されたという。

※昭和47年・48年度「むつ小川原地区 民俗資料緊急調査報告書」(第1次、第2次) 県教育委員会 一部抜粋し、引用する

# 旧二又小学校で炭焼き復活

## 1 平成元年度(1989) 旧二又小学校で炭焼きが復活しました

旧二又小学校では、小又定見校長先生のもと、30年ぶりに「炭焼き」が復活しました。中嶋久太郎氏や古老の指導で、PTAや二又地区民の協力をいただき、平成元年10月18日に炭焼き窯が完成しました。約200kgの炭ができました。平成2年11月には、第35回才能開発実践教育賞を受賞しました。



## 2 平成14年度 最後の炭焼き

旧二又小学校は、平成14年(2002)に、PTAや地域の方々、東和建設の協力のもと、郷土学習として最後の炭焼き体験学習を行いました。4月14日の原木伐り出し作業から、7月17日の窯づくり、9月4日の火入れ作業等が行われました。

